

日本科学未来館「ロボット・ミーム」展

フリーライター 林 公代

1 ロボットが入り込んでくることへの「とまどい」

仔犬のようなロボット「AIBO」は爆発的な人気をもって受け入れられ、私たちの生活の中でロボットと共に生きることが現実になりました。さらにヒト型ロボット「ASIMO」の登場は、ロボットが人間に近づいてくることを予感させます。ここ数年でロボット技術は急激に発展しています。「鉄腕アトム」や「ドラえもん」のように、漫画やアニメの中で描かれてきた、ロボットと暮らす時代が今や夢ではなくてきたのです。

だけどもちょっと待ってください。心の片隅で、期待感と裏腹に漠然とした戸惑いを感じていませんか？ 今後さらに開発が進んで、人間により近いロボットが作り出され、一緒にくらす場面を想像してみてください。人間のように人間でない存在が近くにいることの違和感と恐怖……。私たちはロボットとどう向き合えばいいのでしょうか。

現在のロボット開発は、技術の進展に焦点があてられ、受け入れ側の私たちの意識が追いついていないのかもしれない。



Cyclops 睥睨する巨人
球体関節を多数重ね合わせた脊椎の周囲には、36本のエア・マッスル(空気圧で動く人工筋肉)が配置されている。ロボットの機能、仕組みをデザインの前面に出している。山中俊治制作

そんな危機感から、ロボットを文化や社会の問題としてとらえ、ロボットと人間の関係を考えてみようというユニークな企画展「ロボット・ミーム」展が日本科学未来館(みらいCAN)で12月1日から開催されます。

2 新しい「ロボット・ミーム」の提案

この企画展は「ミーム」という視点から見ることでも新しいものです。「ミーム」とはイギリスの生物学者R・ドーキンス博士が著書『利己的な遺伝子』(紀伊國屋書店刊)の中で造った言葉。文化の情報をもち、脳から脳へ言葉、音楽、映像などによって伝播・複製される仮想的な遺伝子を「ミーム」と名づけたのです。

たとえば、ロボットにおけるミームの代表例が「鉄腕アトム」といえるでしょう。アトムは人間と共生し、人間を助けてくれるロボットとして描かれており、鉄腕アトムミームが広がったために日本人のロボットに対する親近感が形づくられた、とも考えられるわけです。つまり、ミームは私たちの文化的な意味づけや価値感に大きな影響を及ぼすのです。

この企画展では、新しい「ロボット・ミーム」を生み出そうとしています。あえて従来のフレンドリーなロボットとは異なる、見たことのないデザインをもち、人間に働きかけてくるロボットを提示し、さまざまな文化の遺伝子を発信しようという試みです。

3 ロボットに見下ろされる体験

異空間を思わせる薄暗い会場に足を踏み入れると、高さが2メートルほどもあるロボットが、ずっとこちらを見て、ゆらりとゆれる。「Cyclops - 睥睨する巨人」(写真)は、やわらかい脊椎と目玉をもち、知能生物をイメージさせます。ロボットに見下ろされるという体験は、来館者にどんな感情を抱かせるのでしょうか。

コミュニケーションをより意識しているのは「P-noir」。「PINO」のロボットデザインなどで知られる松井龍哉氏の制作です。オルゴールをイメージした空間で、黒いドレスを着たロボットと人間がおどる。松井氏はこれまで自分のつくったロボットがまるでサーカスのピエロのように、珍奇な見世物として扱われてい

ると実感してきたそうです。それを逆手にとって、P-noirが人を笑わせようと動きます。「いったい私に何をしてほしいの？」と問いかけるように。

「オーキソイド」は植物のランと一体化したロボット。人間が近づいたり、光や水分などの環境を変えたりすることでランの生態電流が変わり、反応する様子がわかります。

日本科学未来館の開館前からこの企画展の準備を進めてきた福田幹さんは「ロボットと自由に遊んで、『こわい』とか『かわいい』とかいろいろ感じてもらいたい。そして家に帰ってから、なぜそう感じたかを考えてみてください。きっとロボットに何を求めるのか、そう感じる自分とは何者なのか、見えてくると思います」と語ってくれました。

映画「A.I.」の中で少年ロボットのデイビッドが人間についての情報を記憶していたように、将来、ロボットがコンピューターやインターネットに替わってミーム(情報)を伝えるメディアになることも予想されます。人間がロボットに何を求めるかで、ロボットのコンセプトやデザインが決まってくるのです。

今後、人間とロボットが文化的な生活を共有しあうためにも、技術本位でなく人間本位のロボット開発が

必要になっていくでしょう。そのため第一歩は、一人ひとりがロボットに向き合っ、「何を感ずるか、なぜ感ずるか」を自分自身に問いかける事から始まるのです。



「ロボット・ミーム」展のポスター

日本科学未来館館長 毛利衛さんから



日本科学未来館では、科学技術を特別なものでなく、スポーツや芸術と同じように、文化としてとらえてもらうことを目標にしています。さまざまな科学技術の「ミーム」を広めることは、みらいCANの仕事そのものです。その最初の試み「ロボット・ミーム」展を世界に向けて発信していきたいと考えています。

「ロボット・ミーム」展 開催概要

会 期: 2001年12月1日(土)~2002年2月11日(月・祝)
主催・会場: 日本科学未来館
展示品制作: 銅金裕司+藤幡正樹, 松井龍哉, 山中俊治, 吉岡徳仁
後 援: 文部科学省(予定), 東京都教育委員会(予定)
入場料: 日本科学未来館入館料に含まれます

関連イベント

シンポジウム「ロボット・ミーム」
この企画展のコンセプト「ロボット・ミーム」とは何か、展示物、ロボットデザインの展望について、企画者・出品者が語ります。
期 日: 12月1日(土)13:30~15:30(開場13:00)
会 場: みらいCANホール
定 員: 300名(要予約)
出 演: 銅金裕司, 北野宏明, 藤幡正樹, 松井龍哉, 山中俊治
申込方法: 日本科学未来館ホームページから申しこむか、往復はがきで〒135-0064 東京都江東区青海2-41 日本科学未来館 交流企画グループ「ロボット・ミーム」シンポジウム係あてに、住所、氏名、電話番号、e-mailアドレスを記入のうえ、11月22日(木)までに郵送(必着、1枚のはがきで1名のみ申し込み、多数時抽選)
連続トークセッション
「ロボット・ミーム」展のテーマについて、ゲストを交えてトークセッション(3日にわけて開催。詳しくは日本科学未来館ホームページをご覧ください)

日本科学未来館

住 所: 〒135-0064 東京都江東区青海2-41
開館時間: 日~木は10:00~17:00(入館は16:30まで)
金・土は10:00~19:00(入館は18:30まで)
休館日: 毎週火曜日(但し、祝祭日にあたる場合は開館)
年末年始(12月28日~1月1日)
入館料: [個人]大人500円, 小人(18才以下)200円,
6才以下の未就学児は、有料入館者(引率者)1名につき2名まで無料
[団体(8名以上)]大人400円, 小人(18才以下)160円
ホームページ: <http://www.miraikan.jst.go.jp/>

